

Jovens que lutaram contra a Ditadura

Muitos agricultores eram contra o governo do Jango (João Goulart)

Comentário do Deputado Federal Junji Abe neste artigo:

'Muitos jornais brasileiros escreveram como "golpe" o que aconteceu na época mas para muitos era considerado "Revolução". Antes dessa Revolução em 63, eu tinha 24 anos de idade. Numa kombi com 10 amigos fomos a Brasília para falar com o Deputado Yukishigue Tamura. Ouvimos falar que havia a preocupação da Reforma Agrária do Jango, ficamos muito aflitos e tão logo retornamos a iniciamos o movimento contra o governo. Não poderíamos perder o terreno agrícola que adquirimos com muito sofrimento.'



(中)

軍事革命かクーデターか

反ジャンゴ多かつた日系農家

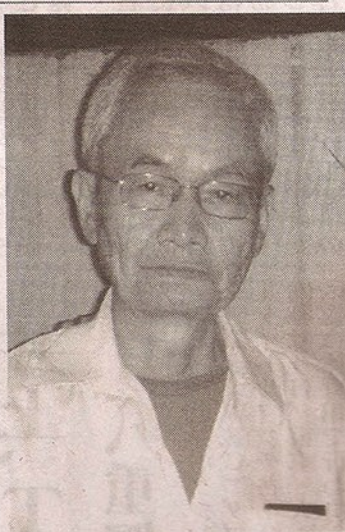
三宅ダリシさんが捕

まつた翌月、1972年2月19日に長野県軽井沢町で連合赤軍が浅間山荘事件を起こし、人質をとって立てこもった。熱い政治の季節だった。独自の視点から新移民

史『百年の水流』(2012年、改訂版)を書いた外山脩さん(72、静岡県)は2面に先週掲載された連載「軍政開始から50年」を読んで、「ワシらは当時何も知らなかつたと思つた」と語つた。

ちようど60年安保闘争の頃、1960年代前半に同志社大学法学部政治学科で学生生活を送つた外山さんは、まさに京都の学生運動の本場に身を置いていた。「授業の

前に左派学生が来て必ずアジ演説をしていった時代だった。右が多かつた体育会系の学生が、左派の集会に殴り込む事件を起こした。だからブラジルに来た時も「こっちの全学連も同じようなことをしているな」と感じていた」という。



外山脩さん

社を潰すつもりか!」つて言うんだ。邦字紙もあの当時監視されていた。日系左翼の連中が拷問で殺されていたとか、当時

は記者であるワシらも知らなかつたし、まして報道はされていなかった」と振り返りかえつた。いわば

「60年代後半から70年代初めにかけて、何かDOPS(社会政治警察)に取材に行つた。あの時、異様な殺気と言うか雰囲気が出ていて、『ああこれが戦場だな』と強い印象を受けた。今になってみると、なるほどという感じがす

る」としみじみと述懐した。その頃、サ紙の水本光任社長のものには、毎年未だにロメウ・ツーマ(77)82年にDOPS最高責任者)やラウド・ナテウ(71)75年に聖州知事)らが挨拶に顔を

出していたと外山さんは記憶する。邦字紙の立ち位置は、明らかに軍政寄りだった。

「60年代後半から70年代初めにかけて、何かDOPS(社会政治警察)に取材に行つた。あの時、異様な殺気と言うか雰囲気が出ていて、『ああこれが戦場だな』と強い印象を受けた。今になってみると、なるほどという感じがす

と4年で民政に戻すという話だった。ところが彼が飛行機事故で変な死に方をし、その後まさか21年も続くとは誰も思つていなかった」という意外な展開を迎えた。一度権力を掴んだ軍事政権は、民衆から離れて一人歩きを初めた。1968年頃から左派学生への弾圧を強め、その流れの延長線上に69年からパンデイランテス作戦、70年からのDIOCodiにつながつていった。(つづく、深沢正雪記者)



安部順二連邦下議

安部順二連邦下議(73、二世)に軍政50年への見解を問うと、「革命」についてですね」と返した。伯字紙の多くは

「クーデター」と書くが、肯定する派は「Revolução(革命)」とし、今も見解が分かれている。「革命」前年の63年、私は24歳でした

が、モジの友人らと10人ほどでコンビに乗って、ブラジリアの田村幸重議員に話を聞きに行つた。「ジャンゴ(ジョアン・グラルル大統領)が農地改革をするのではないかと心配だ」と彼が言ったのを聞き、心底驚きました。すぐに帰って親と相談し、反対運動を起こした」という。

日系人の多くが農業に従事していた60年代はコチア産組、南伯農協などの全盛期でもあった。「日系人は苦勞して土地を手に入れて農業で生活をたてて来た。その土地が農地改革によつて二束三文で泣く泣く取り上げられるかと思つたら黙つていられたら良かった」。共産主義に共鳴するジャンゴよりも、軍政に親近感を抱くのも無理はない状況だった。だから「革命」が起きた時は、むしろ安堵した側だった。「最初のカステロ・ブランコ將軍の頃は2年